



平和への想いをつないでいくために

私たちの戦争体験談

戦後73年が経ちました。戦争・被爆経験者は徐々に少なくなり、戦争の記憶は風化しつつあります。京都生協では、戦争の記憶を次世代に伝え、平和への想いをつなぐとくみを行なっています。コーポロ5月号で募集した戦争体験談の中から、2人の投稿をご紹介します。

厳しい戦争統治下で 曾祖母が示してくれた道

京都市右京区 大和田多可

私自身は戦争を体験していません。父は海軍で南方へ従軍しましたが、何一ついっさい語らず（語れず？）他界しました。

母から聞いた話は、“壮絶、悲惨な戦争体験”ではなく、普通の女学生とその家族のただの会話です。しかし私には「これが“戦争”なんだ」と見え、聞き流すことができずに40年間、私の中にあります。

私がテニスに合唱にと明け暮れた高校・大学のころ、母はふと「私があなたくらいのころは、そんな風に明るい楽しみなんて何もなかった。楽しいことなんて考えられなかった…」と話し始めました。

「看護師になりたかったわけやない。祖母に『お前、女学校へ行ってゲートル※を縫っていてもしようがない。それより看護学校へ行きなさい。そうしたら家庭に入ってからも何かの役に立つ』と言われたからや」

- たったこれだけの短い日常会話でさえ、
- ・勉学の権利なんてない。学ぶはずの場では子どもも戦争補助のゲートル作り
- ・職業選択の自由なんかない（か、極めて限られている）
- ・楽しみなどなく、考えることすらできない。夢はもちろん、望みを持つことも許されず、明るさんてない。

少なくとも、そんなことが分かります。

母はその後、私の幼少期にしばらく休職したのち、75歳まで看護師を続けました。衛生感覚や傷病の手当て、日常的な病気の症状と見極め、衛生管理など、曾祖母が言ったように「家庭に入って役立つ」ものは、その通り、確かに私の中にあります。包帯を巻く時、台所のふきんをこまめに塩素消毒する時…。「私」から「母」を通して「戦争」までつながります。

生死の淵を歩むような体験からは免れた者からも、現代なら当然手に入るものをことごとく奪っていくのが戦争なのだと、怒りでいっぱいになります。一方で、「ゲートル縫ってもしようがない」と他人に聞こえてはならぬことをさりと言って、孫の未来をわずかでも照らし導いた曾祖母のように、時勢と未来を見抜く視野をもった利口な女性でありたいと思います。

※ゲートル…すねの部分に巻く布・革でできた被服。軍服に用いられた。



母と姉が語った 引き揚げの苦難の記憶

城陽市 酒井千津子(69歳)

雨の日の縁側で繕い物をしながら、母は独り言のように、小学生の私に引き揚げのことを語ってくれた。「結婚しようと思ってた人が戦死してな。『誰でもええわ』と思って、2人の小さい子を抱えて困っていたお父さんのとこへ来たんや。けど、結婚式を挙げて、お父さんの赴任先の羅津らしんに着いて1カ月もたたんうちに避難命令が出て、鍋と毛布と、ほんの少しの着替えを持ったまま家を出たんや。」

羅津は北朝鮮の中でも最も北だ。列車は走っていない。線路伝いに、とにかく南へ南へと歩いた。当時5歳の兄の背中にも毛布がくくりつけられた。知らないおじさんに「よく、その毛布重いだろ。持ってあげる」と言われて、兄は喜んで預けたらしい。毛布はそのまま返ってこず、残り1枚の毛布で4人が寝ることになった。

近所の足の悪い娘さんが、両親に置き去りにされていた。見かねた父が手を引いたり、負ぶったりしながら連れて歩いたが、すでに自分の子どもたちだけ

でも精一杯だった。途中、人通りの多いところで「ここで待っていたら、きっと君のご両親に会えるから」と、置いてきたそうだ。

お金がなくなると、父は頼み込んで農家の手伝いをしてお米や大豆をもらってきた。母は用を足すふりをして畑に入り、こっそりかぼちゃをもらってきたそうだ。

母が亡くなってから、当時8歳だった姉に「引き揚げの時のこと、覚えてる？」と聞くと、「あんな惨めなこと、誰にも話してないわ」と、ポツリポツリと語ってくれた。

「大豆はよう炊けへん間に食べたし、いつも下痢してなあ。お風呂にも入れへんし、ノミが体中にわいて、プッチンプッチンつぶして。農家の軒先を借りて寝たり、野宿の時は竹の先と先を結んで屋根にしたり。誕生日にお父ちゃんが買ってきてくれた人さし指くらいの魚が、1年半かかった引き揚げ中の一番のごちそうやったわ」と。

今から思うと、母はあんな惨めな体験をする戦争は二度とごめんだと伝えたかったのだろうと思う。

「みんなでいこうピース&ピース」を 開催しました!



6月21日(木)、平和を願うイベント「みんなでいこうピース&ピース」を開催しました。

午前中は京都テルサで講演会「語りをつづる 原爆の子の像 六年竹組の仲間たち」を開催。「原爆の子」の像のモデルとなった佐々木禎子ささきただこさんの同級生である川野登美子かんのとみこさんが語り部となり、「原爆の子」の像と、建立に関わった「六年竹組の仲間たち」のお話をみんなで聞きました。



その後は「みんなで平和を願って変わり折り鶴を折ろう」と題し、日本折紙協会京都支部 松井佳容子まつい かよこさんに折鶴の折り方を教えていただきました。午後からは「2018ピースパレード」を行ないました。円山公園ラジオ塔から八坂神社、四条通を通過して市役所前まで、午前中に折った折鶴を沿道の人に配りながら歩きました。

今年は梅雨のわずかな晴れ間で蒸し暑い1日でしたが、平和を訴えながらのにぎやかなパレードとなりました。

